

藤田浩子の 少し昔のこと 〈83〉

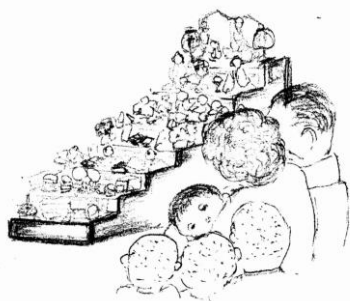
雛飾り

自慢気に言うと、私は7段飾りの雛人形を持っていました。「した」と過去形で書くのは実家の火事で焼けてしまったからです。私には兄が3人いて、4番目に待望の(?)女の子が生まれたので、親が奮発して買ってくれたようです。太平洋戦争になる前の、少し景気がいい時だったとはいえ、我が家の家計からは大きな出費だったと思います。赤ん坊だった私が欲しいと言ったわけではありませぬ。母が欲しかったのです。母が女の子を産んで、それを機に父にねだったのだと思います。

雛祭りというのは、江戸中期に公家の文化として始まり、それが武士の家で真似され、明治中期に一般庶民(の金持ち)

に伝わったそうです。

私の母は明治39年生まれですから、そのころには身近にお雛様を持っている子もいたでしょう、とても



うらやましかったという話をよく聞かされました。よく自分が習いたかったピアノを子どもにさせるとか、自分が行きたくても行かれなかった大学に子どもをいかせたがる親がいますけれど、私の母は自分が買ってもらえなかった雛飾りを娘をダシにして夫にねだったのです。男雛女雛、三人官女、五人囃子、右大臣左大臣、三人仕丁、それぞれの人形の間にも、高坏に乗せた菱餅や右近の橘左近の桜などなどのお道具が並びますが、6段目には嫁入り道具、長持ちから針箱、鏡までが並び、7段目には嫁入り時の乗り物牛車などが並びました。

フランさんとアメリカのジャパニーズレストランに入ったとき、そこに7段飾りが飾ってあったのですが、五人囃子が一番上の段にあたり、お内裏様が3人仕丁と一緒にいたり、めっちゃくちゃに並べてあり、私が直したいと言ったら、ショウウィンドウの中に入れてくれて、これは高貴な方の結婚式だと言いながら直して、喜ばれたこともありました。

リレー連載 <216>

わたしの大好きな絵本

ひらちゃん(NPO こどもすぺーす 柏 ポレポレ)

深々と降る雪におおわれた森。その雪の下では動物たちが冬眠中。のねずみ、くま、かたつむり、りす、やまねずみの静かな寝息が聞こえてきそうです。すると、みんなは目を覚まします。そして、はなをくんくんさせながら、雪の森の中をかけていきます。かけるかける、みんなかけていく。ピタリととまった先で、うっふっふと笑い出す。踊り出す。まだまだ雪の降る中で、春が近いことを知る動物たち。喜びの笑い声が聞こえてくる画面。そこには、一輪の黄色い花が咲いています。

『はなをくんくん』

文： ルース・クラウス

絵： マーク・シーモント

訳： きじま はじめ

福音館書店

白黒のモノトーンなページがずっと続き、最後に咲いたお花にだけ、黄色い色がつく。あったかさがじわ~んと伝わって来ます。静から動への躍動感に心が揺れて、少し前を向こうかな、と思わせてくれる絵本です。

